

銀のスプーン

35集

銀のスプーン ペンクラブ

まえがき

「自分と自分をとりまくナマの生活などを文とか詩歌、俳句として表現する、書きとどめることは、それが個人的なささやかな体験でもその積み重ねは国、民族、社会の歴史にもなる…」のまえがきで始まったペンクラブ『銀のスプーン』は創刊から三十八年が経ち、多発する自然災害、暴走する政治、火種が絶えない世界情勢など心穏やかに過ごせない時代になってきました。この世相を反映して寄稿いただくテーマも、主張や意見が多くなってきました。

『銀のスプーン』は、ものを言うツールとしての役割、激動の時代を次の世代に伝える、歴史の再検証など記録ツールの役割、基本となる文芸の世界で、創作のツールとしての役割を担っていると考えています。

今年には阪神淡路大震災二十年、終戦七十年の節目の年でもあり、この様な背景の中で初参加の九名を加え三十七作品を寄稿いただきました。いずれも読みごたえのある作品です。四つのセクションにまとめました。編集者の独断をお許しください。

震災二十年・戦後七十年

神戸大震災直後に市議として行政と対峙してきた恩田はその経緯を、孤独な避災者を週末ボランティアとして二十年間訪問してきた東條健司さんが初参加、桃谷さんは地震の怖かった思いを書かれました。戦後七十年ペリリュー島が最近話題になりましたが、ミクロネシアのメレヨン島でも玉砕があり多くの兵士が亡くなったことをミクロネシア連邦名誉領事の荒木さんが、教育者の浜本さんは戦前の軍国主義教育の実態を当時の記録から、戦後の神戸で初めて会ったアメリカ人のことなど大西富子さんは子ども心の思い出を、神戸新聞の記者であった千葉さんは当時のアメリカ訪問の様子を、編集委員で本妙寺住職の池上さんは偶然飛行機で隣あわせた自衛官の様子から軍事大国にはならないと確信した思いを書かれました。

東北大震災・原発事故・家族の絆

子どもたちの命や未来を守るために原発廃止の活動されている「ちびくろ保育園」の田中英雄さんが初参加、緑の党の河合さんは脱原発に対する想いを、福島の避災児童を夏休みに招いて保養を続けるNPOの活動を恩田が報告、「あのねちょう」の教育で

有名な鹿島和夫さんが初参加で一年生のまさし君の家族のことを、遠隔地の母親の病状を通して植月さんは母への思いを、卒寿を迎えた大西安美さんは初参加で父親と家族への思いを自分史として書かれました。

詩歌・随筆

奈良あすか野に住む喜びを富永悦夫さんは短歌で初参加、河合成一さんの母上の丕瑳子さんは春の思いを俳句で初参加、常連の大和さんは暮らしを俳句に、ペン友大先輩の雨森育代さんは川柳でカムバック。牧さんは万葉集の相聞歌からの思いを随筆に、庭の柿の木にくるカラスから小森さんはファンタジーを、川西の北上さんは優しい思いを四編に、むかでと鯖すしをテーマに福中さん、徳島県の山奥木頭村で育った藤田さんは子どもころの怖かった伝説を、岡山の尾島さんは皇居での表彰を、速水妙子スヴェンソンさんからは六通目のスウェーデン便りが届きました。

主張・歴史

編集委員の村山さんは三十四集が電子書籍化されたことの祝いを、中東が専門のジャーナリスト平田さんは「世界最後の植民地」と言われている西サハラ解放される

日をめざして、アベノミクスでは女性の社会進出が喧伝されていますが徳永さんはその現実を、住民は誰でも海浜を自由に利用できるという「入浜権」の考え方を日本で初めて提唱された高崎裕士さんは初参加で四十年の歴史を、その記念大会に参加されたカリフォルニア大教授の羽生淳子さんは報告を、西行の歌碑公園の花見会の後に訪れた川西の満願寺は素晴らしい空間で郷土の歴史に詳しい菅原さんにその由来を、異業種交流「一金会」の講演からお願いで初参加の尾垣誠宏さんは大和朝廷成立の定説に挑戦されている話を、椎名麟三研究家の田藤さんは麟三の幼児期のエピソードを書かれました。

寄稿者は三十二名に達しました。寄稿者紹介欄は相互理解をはかるために字数を増やしています。活用ください。個人情報のこともあり、住所の番地は省略しました。三十四集から活字を大きくしていますが、三十五集から行数を一四行に復活し、より多くの内容を記載できるようしました。ご意見をお待ちしています。

投稿を思いながら諸般の事情で見送られた方、健康上断念された方などお聞きしています。これからも未永く執筆頂くことを心からお願いいたします。

三十六集 寄稿お願い

次集の発行を来年三月とし、投稿をお願いいたします。投稿規定は変わりません。企画テーマについても提案ください。出版に対する提案や意見もお待ちしています。

電子書籍化され多くの人の目に触れる嬉しいことになりましたが、一方で引用など著作権の問題には、より注意する必要があります。留意をお願いいたします。

電子書籍に登録されペーパーレス時代を迎えています。本という形は貴重な存在であることに変わりはありません。

物価の上がることを良しとするおかしな政治のなかで財政も窮屈になっています。

継続して出版を続けるために維持会員（年会費二万五千円、特典など詳しくは維持会規程を請求ください）に参加ください。新しく参加される方の掘り起こしも協力ください。

二〇一五年六月 編集長 恩田 怜

編集委員 村山茂、池上正示

目次

まえがき

震災二十年・戦後七十年

阪神淡路大震災二十年……………	恩田 怜	12
——行政による人災を問い直す——		
二十年目からの被災者への道……………	東條 健司	31
震災の思い出……………	桃谷 道子	36
玉碎 メレヨン島の悲劇……………	荒木 芳雄	41
発火演習……………	浜本 純逸	45
——旧制中学校における軍国主義教育——		
私の昭和史（3） 戦後の神戸編……………	大西 富子	61
アメリカ旅行記……………	千葉 俊壹	69
二人のつましい自衛官の話……………	池上 正示	72

東北大震災・原発事故・家族の絆

原発再稼働と国家の「株式会社」……………	田中	英雄	78
——国民の命より「金」が大事と判断している政府には頼れない——			
脱原発に向けて……………	河合	成一	84
福島の子ども達と共に……………	恩田	怜	87
両親の復縁を願ったのに……………	鹿島	和夫	97
——「あのねちょう」から、まさし君とお母さん——			
母とわたしの昭和史（3）……………	植月	京子	113
卒寿によせて……………	大西	安美	147
詩歌・随筆			
春のあすか野（短歌）……………	富永	悦夫	162
春静か（俳句）……………	河合丕	瑳子	165
黄落（俳句）……………	大和	齊	168
種種な日（川柳）……………	雨森	育代	170

春の野の ^々 若菜摘み ^々	牧	彰	172
カラスのお礼.....	小森	宰平	176
老いの波.....	北上	弘美	180
夢想.....	北上	弘美	182
ステーキ.....	北上	弘美	184
付き添い.....	北上	弘美	186
わたしは百足.....	福中	保江	188
私の好物.....	福中	保江	190
山の伝説「阿瀬吾の万」(1).....	藤田	恵	192
表彰.....	尾島	生子	203
スウエーデン便り(6) 夏のできごと.....	速水妙子	スヴェンソン	229
祝『銀のスプーン』電子書籍化.....	村山	茂	238

主張・歴史

西サハラ大統領にゲルニカ平和貢献賞！	平田伊都子	242
女性の社会進出について	徳永 菊代	247
入浜権宣言四十年	高崎 裕士	253
入浜権宣言40周年記念集会に参加して	羽生 淳子	258
満願寺と飛び地の経緯	菅原 巖	262
遼東公孫子大和朝廷創成説	尾垣 誠宏	270
埋めたツリ銭 幼年期の椎名麟三	田麿 新	293

あとがき

西行の歌碑を愛する会

寄稿者紹介

震災二十年・戦後七十年



阪神淡路大震災二十年

——行政による人災を問い直す——

恩田 怜

震災から二十年、神戸の街を歩いてもあの悪夢の痕跡は、もはや見あたらぬ。何事もなかったように見えるが、天災・人災の影響はいまだに計り知れない。震災を知らない市民が四割を超えたという。当時を思い返し、人災の数々を次の世代に伝えて、今後の天災に備えなければならぬと思う。

震災直後に市民派の市議員となって行政の問題点を指摘してきたが、今も私の胸の底には重いヘドロのようにたまっている。二十年経って私の記憶が正確だったか、主張が正しかったのかは、検証する時間も方法も限られているが、この機会に、記録に残したいと願う。

一月十七日

突然、ベッドで体が突きあげられる、寝室の上の棚から箱が落ちてくる。とつさに布団を被る。どこか遠くの街で地震があったのかと一瞬頭を過る。毎朝、早くから駅立ちをして、四月の選挙に備えていたが、この日は成人の日の振替え休日の翌日で、ピラマキのメンバーがそろわず、寝ていたのだった。

揺れが収まって、居間に入ると、部屋の中はめちゃくちゃになっている。飾り棚の上にあった那智黒の四、五キロはある飾り石や花瓶が転がっている。この下に寝ていたらと思うとぞっとする。よく見ると、東西に向いている本棚や台所の食器棚はそのままでも何ともない。南向きの部屋の壁が崩落している。庭に出てみると灯籠がなくなっている。倒れたのではなく南側の斜面に飛んでいた。

わが家は六甲山脈西端の山の上であり、大阪湾を見下ろし、淡路島が前に見える。今回の震源地はその目の前の明石海峡の海底と後に聞いたがまさに震源地の直近である。岩盤の上に建っていたのか、幸いこの程度の一部損壊で済んだ。山の上なので都市ガスが来ていなくてプロパンボンベ、水道は地下貯水タンク、ふだんは不便をかこ

っていたが、この時は補給がなくて一週間は大丈夫だった。しばらくすると電気が復旧してライフ・ラインはすべて確保できた。

翌日はおにぎりや茶を大量に作り、知人の安否を確かめるために車を東へ走らせた。須磨の海岸通はビルや家屋が国道2号線に倒れこんでいる。なんとか通り須磨のHさん宅に行くと完全に倒壊している。避難所になっている近くの小学校に行くが見当たらない。知人を知っている人がいて区役所に避難したのではないかと教えられる。区役所も訪ねる。一階の部屋を覗くと電気もつけずひっそりしている。おかしいなと思いつつ、二階に上がり本棚の間に避難している人に訊ねてみるがわからない。一階は遺体安置所になっていることがわかる。外の広場に家族三人が車の中にいるのを見つめる。お互いの無事を喜んでおにぎりと茶を渡す。

さらに東へと車を走らす。灘区鹿の下のKさんを尋ねるが、ここも家は崩壊している。近くの人から一家は無事で大阪の子どもの家に避難したと聞く。夫人は六時間も家の中で挟まれていたとのこと、無事がわかってやれやれ。JR六甲道の近くのYさん宅を探す。ここも崩壊して誰もいない。近くの人から少し離れたビルの息子のと

ころにいと聞く。探し当てて訪ねると、全員無事であることがわかる。おにぎりとか茶を差し入れる。初めて米粒にありつけたと涙ながらに感謝される。お互いの無事を喜び合う。

さらに東へ進もうとするが、道路がふさがっていて諦める。多くの道が通れない中、須磨、鷹取、新長田、兵庫とＪＲ線路沿いの道を縫うように走ると通れることがわかる。以降、毎年、震災記念日にはこの経路を走り、その後の復興状況を確認する震災道路となった。帰りの国道２号線は須磨あたりから、まさに「難民が避難する」さまざまで西へ向かう人の群れが道路一杯につづいていた。知らない女性を乗せて走る。

明石海峡大橋は建設工事中で、海底に橋脚を深く打ち込み、その付近が震源地になった。海の神の逆鱗に触れたせいで地震は起こったと噂された。私は私で神戸市が六甲山を切りくずし、その土砂で広範囲に海を埋め立てたその膨大な重量によって、急激に重量バランスが崩れ、地殻変動が起こり地震が起きたと思っっている。その証拠に六甲山が地震によって少し隆起し高くなった。

がれき撤去と仮設住宅

崩壊した家屋のがれき撤去に国から費用がでた。業者は争って儲けになる解体作業を請負い、がれきを海岸や裏六甲の処理場へ運び焼却した。粉じんのアスベストによる肺がんのことやダイオキシンの発生などには無頓着に作業は行われていった。また壊さなくて復旧できる建物や、歴史的に保存価値のある建物なども公費撤去の魔力で次々と壊されていった。

仮設住宅は広い敷地に大量に建設された。効率を考へてのことだが、住む人間のことは考慮に入れられず、住宅地から離れた埋め立て地や山の造成地に作られ、それまでの街のコミュニティは破壊されていった。これは後に建設された災害公営住宅も同様で、仮設住宅、災害公営住宅とコミュニティはずたずたに破壊されていった。

その結果人々の街に対する疎外感が生まれ多くの老人が誰にも見とられずに孤独死することになる。

私は崩壊した住宅にはそれぞれ家の跡地に建てられる仮設（一軒二五〇万円かかった）を支給するべきだと主張した。期限を切られずに住めるし、さらに二五〇万円も

かかった撤去費用も不要だし、コミュニティも保たれると主張したが。

震災と火災

福島の原因事故が想定外だと東電や政府が言ったように、神戸市は大震災を想定せず、都市計画の耐震強度を震度5強と定めていた。これは室崎益輝神戸大学教授ら御用学者の集まりともいえる審議会で決められた値である。震度7の大震災はこのことが人災を決定づける最大の要因となった。震災後に彼はこのことを深く反省して過ちを認めたことは評価できたが、戦犯の事実を取り消すことはできない。東北大震災が震度7であったことも記憶に新しい。

神戸市役所の庁舎も一部が崩壊し、病院や消防所、警察署など災害時の対応の中心となる施設が崩壊し役に立たなかった。海上都市ポートアイランド、六甲アイランドは孤立し災害を増幅させた。ポートアイランドに移されていた市立市民病院も災害救助の役に立たなかった。大きなビルが横倒しになって、道路をふさいでいる光景は今も映像として頭の中にはつきり残っている。